

刊行のことば

世界は一刻も休んでいない。しかも、今日は、交通通信の発達により、国境を越えた人、物、金、情報等の流通がますます活発になりつつある。いわゆるグローバリゼーションの流れの中で、世界各国の社会経済は、過去には見られなかったような速さで変化しつつある。農業といえども、その例外ではあり得ない。

日本の農業も、独自の条件をもっているとはいえ、世界の農業とのつながりは、ますます大きくなっている。世界とともに考え、世界とともに伸びるのが、日本農業の今日の使命である。この叢書の目的とするところは、まさにこの使命を忠実に実行するところにある。

編集委員

安藤光義	鈴木宣弘
池上彰英	立川雅司
大山利男	三石誠司

(五十音順)

地域とは何か、地元とは何か

地域アイデンティティの検証

解題/翻訳 安藤 光義

解題	1
文化経済と地域開発	10
1 はじめに	10
2 地域(文化)経済アプローチの起源	13
3 文化経済の様式	14
4 地域アイデンティティと LEADER 戦略	19
5 民族的文化モデル	22
6 自己同一性と心理学的隠喩	28
7 結論	34
「典型的な地方の食品」とは何か	40
1 はじめに	40
2 食品と地域との繋がり	43
3 典型的な地方の食品の呼称制度	47
4 ディスカッション	54
5 結論	59

解題

安藤 光義

東京大学大学院農学生命科学研究科准教授

地域とは何か。地元とは何か。農村らしさ Rurality とは何か。一見すると極当たり前で全く自明のことなので、こうした問題を私たちは考えることさえない。しかしながら、囲い込みによる「農民清掃」で伝統的な農村は破壊され、その後も資本主義的農業が全土を覆い、歴史的地理的個性を大きく減じてきた英国では、これが大きな問題とされている。

ここで紹介するのは、Christopher Ray(1997), Rural development and Culture Economies, Newcastle University, Center for Rural Economy Working Paper No.25 と Angela Tregear(2001), What is a "Typical Local Food"? An Examination of Territorial Identity in Foods Based on Development Initiatives in the AgriFood and Rural Sectors, Newcastle University, Center for Rural Economy Working Paper No.58 である。前者は文化経済学という視点から地域開発戦略の検証を行いながら、後者は地元の典型的な食べものという視点から表示制度のもつ矛盾に焦点を定めながら、ともに地域アイデンティティを論じた論稿である。いずれも10年以上前に発表されたものだが、そこで提示された問題認識の枠組みは現在も適用可能である。

詳細は訳文を参照して頂くことにして、以下ではそれぞれの大まかな内容を簡単に記すことにしたい。

地域開発と文化の関係で論じたのが「文化経済と地域開発」である。地域開発にとってのポイントは地域アイデンティティの確立であり、そのために文化は使われるし、再構築されるもするというのがここでの主張であり、LEADER に取り組んだスコットランドとブルターニュの事例を通じてその具体的なプロセスの検証が行われる。

地域文化経済アプローチの登場の起源は途上国の開発戦略の失敗に求めることができる。この失敗が民族意識、文化意識、環境主義、コミュニティを喚起、民族アイデンティティ、文化相対主義を生み出していった。こうした思潮の下、EU の構造基金は地域資源を活用した開発戦略を考案したが、その資源の1つが文化だったのである。

「社会階層と緊密な繋がりを有していた近代初期の客観的な空間はより一層主観的で再帰的な空間へ移行」(Lash and Urry) したという現代社会に対する認識を前提としてレイは、地域アイデンティティの形成過程を「自己同一性と成長」に喩える。文化や伝統は確固不動のものとして存続しているものではない。文化は再帰的な人間の主観性に基ついて絶えず再構築されているものであり、地域アイデンティティの形成過程は不断の意味の創造なのである。文化は変容し、地域の範囲も変化するのである。このレイの理解は、農村を自明のものとしてごく当たり前に受け止めている日本人には難解かもしれない。

レイは文化経済を4つの様式に分類する。1つは文化の商品化である。民族ツーリズムや文化ツーリズムがその典型である。これを支えているのは利益の地域独占が可能である点と、地域経済が脆弱であるがゆえに文化のために経済活動を設計できるという点である。2つめが地域アイデンティティの創出である。地元の様々な団体組織が結集するなかで地域アイデンティティは構築され、その中で地域開発戦略は練り上げられていくことになる。3つめが地域開発戦略の地元社会への売り込みであり、人々に「自分たちはやれるんだ」という気を起こさせることである。ここでは歴史修正主義の採用がポイントとなる。最後は文化経済が有する環境倫理の強調である。

2つの事例とも複数の行政領域を1つの地域とした「非常に不自然な同盟関係」だが、それゆえ地域アイデンティティを新たに構築する必要があった。その意味で地域アイデンティティ＝文化は社会的構築物であり、開発戦略との関係でいえば「商品化を通じたシンボル創出」としての性格も備えているのである。そのため「本物」の社会民族的アイデンティティと対外的に示す文化的ア

アイデンティティとは別であってもよい。しかし重要なのは「地域文化アイデンティティ構築の中心的な目標は、過去も現在も地域の経済的福祉を損なってきた内外の要因に対する「統制力の獲得」である。文化経済は人々が持っている革新力、企業家精神、資本を地域に限定し、地域の自覚を喚起し、文化的素材を用いて地域の歴史の復活を図ろうとするものなのである」という点である。

また、事例の1つであるスコットランドのゲール文化は環境倫理的な性格を色濃く有しており、文化を守ることは地域の自然を守ることとして認識される。「文化の保全は未来へ向けて環境を保護する手段」「この文化はゲールという領域の中でのみ存続できる」「ゲールのアイデンティティはある特別な地域によって心理的に定義されたものとして描き出される」「地域や土地に対して全く不合理としか言いようのない強烈な愛着を持っており、それはケルト的特徴として深く刻印されたものである」というのはその表明である。これは「農村文化の保護が環境保護である」という日本のロジックに近いものがある。

さらにレイは「本来的に文化は革新を生み出し、社会経済的活力をもたらす内発的な力を有している」とし、「この能力は再建できる。必要なのはゲール文化の価値観に対する信頼を発展させる議論を展開し、活力ある文化的環境の中で自分たちは価値ある存在だという感情を強化させることなのである。そこでは、文化はそれ自身のために存続し、繁栄することが許されるべきだという、文化的多様性に適用される道徳哲学が求められているのである。事実、存続する「権利」が文化にはある」と主張する。ここでいう「文化」は「個人」あるいは「人間」と置き換えが可能であるように訳者には読める。それは地域アイデンティティの形成過程を個人レベルでの「自己同一性と成長」として把握する視点に繋がっていく。

自己とは「再帰的な企て」であり、「今や自分の民族アイデンティティを自らの意識によって選択できるようになった」とする Giddens の見解を前提にレイは、地域開発を自己成長・学習プロセスとして捉え、個人の成長と歩みを同じくして地域は発展し、「人間に対するのと同じ心理療法で地域に対処すべき」だ

とする。そして、「地域文化アイデンティティは「意味のある」単位に依拠する必要があり、その単位は明確で歴史的に連続したルーツのあるものではなくてはならない。新たに設定された地域が活力ある結束した単位となるためには、自分の歴史を理解する必要がある。社会的に規定された自らのアイデンティティを理解することによってのみ、新しく創出された地域は十全に機能する実体として問題に対処することができる」と主張する。また、「古い歴史や最近の歴史に関連する史料を発掘すればするほど会員たちは自分たちの社会や地域に対して帰属意識や参加意識を覚えるようになり、それを強めていった」というウェールズの事例を引用し、「参加促進の原理は人々の「成長」を支援した」と結論づける。これが意味する内容は日本でいう「地域の宝探し」に近く、「地元学」と共鳴する。ただし、それを個人レベルでの人間的な成長と関連づけようとしたところにレイの卓越した点があるように思う。だが、「地域戦略の重点は目に見える結果ではなく、様々なことが可能となるプロセスに置かれる」という結論は洋の東西を問わず同じであろう。

最終的に目指す目標も同じである。すなわち、「かつては否定的に評価されていたものが、今や肯定的な評価を受けるようになるというアイデンティティの転換である。生家に残っているゲール人はもはや「敗残者」でもなければ、街を飛び出す能力のなかった人でもなくて、自ら地元に残ることを選択し、喜んでこれを自らのアイデンティティの一部とした者なのである」という状況を生み出すことである。これが「あとつぎ他出規範」(小田切徳美)という「滅びの社会規範」(宇佐美繁)を覆し、「誇りの空洞化」への抵抗と「暮らしのものさしづくり」(小田切徳美)を支える規範となるはずである。ただし、ゲールは明らかに差別と迫害を受けてきた歴史を持つ民族であり、そうであるがゆえに歴史修正主義によって逆転を図ることができたという英国の歴史的な脈をどう考えるかという点は課題として残されている(注)。

しかしながら、レイの文化および地域の捉え方からすればそれは問題とはならないかもしれない。「開発は、現実の具体的な地元コミュニティの中からあらわれるのではなく、一連のアイデンティティの中で個人が生き生きとすること、

いくなれば人格的な成長の実現を通じて初めて現実のものになる」からである。極端な言い方をすれば、その実現のためであれば文化や地域はいくらでも再構築されて構わないのである。「地域アイデンティティは、幅広い解釈の余地を残し、地域の人々や集団が全体としてのアイデンティティに自己の解釈を付け加えられるようにしなくてはならない」というのは、一定の枠組みを与えられた中で無秩序的な自由な反乱を認める点にこそ地域開発の核心があるということなのだろう。この点については「のびゆく農業 989 地域おこし支援者に求められる資質 Local Action Group で働く人々」を参照して頂けると幸いである。

なお、地域の外から「外貨」を稼いでくることを目的とした地域開発戦略は、本来の「開発」を経済振興に矮小化した「国際貿易モデルの経済成長に強く依拠したもの」だとレイは批判的にみる。これまで日本が取り組んできた農村地域の活性化は彼の眼にはどのように映るだろうか。

「再帰的な企て」としての自己にとって文化、地域は自明のものではなく絶えず再構築され、不断に創造されるものだとすれば、地域の伝統的な食べものについても同様の論理を適用することができるかもしれない。歴史のある郷土食も自明の不変の存在ではなく、絶えず工夫が加えられ、意味が付加されているものとして捉えるべきではないだろうか。この問題について、地域アイデンティティを活用した呼称制度や産地表示制度を事例として取り組んだのが「典型的な地方の食品とは何か」である。「典型的な地方の食品 Typical Local Food」という訳語にはやや問題があり、「地域の伝統食」「郷土食」とした方が日本語としては相応しいように思うが、英国では産業革命期以降の工場生産による食品もこの範疇に属するため、このような訳語とした次第である。文脈に応じて適宜、「地元の伝統食」「典型的な郷土食」というように読み換えて頂ければ幸いである。

トレガーは「典型的な地方の食品」は、文化資産の保護 地域活性化、

マーケティング 差別化・付加価値獲得) (生態学的な)持続可能性 地域環境保全とのリンケージ、という3つの意味を有しているとする。そして、この「典型性 Typicity」は、「人口移動」(シトー修道会が伝えたチーズが現地に根付いて英国の郷土食に転化した事例など)、「貿易」(砂糖貿易が盛んだった都市で独特の砂糖菓子が生まれた事例など)、「産業化」(工場で生産される特有の飲料が地域の伝統となった事例など)、「農業政策」(地理的な特徴や多様性を喪失させる要因)の4つによって形成され、それが「消費者の認識」(最終的な生産物に対する認識であり、もの自体に対する消費者の評価や認識である)というフィルターを通して現実的な意味を持ち得るという理解の枠組みを提示する。つまり、ここでいう「典型性」は「静態的なものではない」し、「時間の経過とともに変化」するものなのである。

この枠組みを用いてトレガーは3つの具体的な制度を事例に検証する。3つの事例は上で記した3つの意味の 、 、 にそれぞれ対応する。

1つめの事例、EU 規則の原産地呼称保護制度(PDO)と地理的表示保護制度(PGI)は文化遺産の保護を目的とするものであり、偽物を排除することで本物の食品の名声と評判を守り、その競争の優位性を確保するものである。この制度では地理的特性や風土によって規定される製造方法を登録し、製造工程の確実な遵守が義務づけられる。「社会的文化的に重要な文化遺産としての引用者)食品の製造方法を保護・保全する」制度である。ただし、これはマーケティング(「意味」)と補完関係にあると考えられる。

2つめの事例、英国食品協会による地域の名産品グループはマーケティングのための制度である。地域固有の製造方法に基づくものではなく、消費者向けのイメージづくりに力点が置かれている。「地域アイデンティティは製品に望ましい性質を有しているという印象を付与し、消費者に製品をアピール、価値を与えている」のである。いわば「消費者の認識」へのはたらきかけを目的とした制度であり、「典型性は特別な生産の具体的なあり方に「固定」されているのではない。消費者の認識に対応できるように生産者の手の裡で修正され調整される製品が有する、つかみどころのない性質」としてここでは機能している。